伝統的な農業教育を活かす高校現場での取組み例

神奈川県立吉田島高等学校　教諭　古澤秀忠

１．はじめに

（１）学校概要

本校の所在地開成町は、神奈川県の西部を流れる酒匂川の扇状地のほぼ中央に位置している。原始・古代の酒匂川は、足柄平野の中で流れを変えながら扇状地を形成し、洪水の危険にさらされながら集落が形成された場所とされている。この地域に明治 40 年 4 月足柄上郡立農業補習学校として創立し、その後幾多の変遷を経ながら、昭和 23 年 4 月に神奈川県立吉田島農林高等学校となり、昭和 32 年 4 月に農林土木科設置、農業の専門高校として地域社会と連携しながら大きな役割を果たしてきた。平成 22 年 4 月に学科改編となり、吉田島総合高等学校となった。園芸デザイン系列、地域環境系列、ライフデザイン系列、人文国際系列、科学・情報系列の５系列からなり、特に農業に関する系列を有する総合学科高校は県内唯一であった。平成 29 年 4 月に学科改編により再び専門学科として、環境緑地科、都市農業科、食品加工科の３学科の構成となった。

総合学科では、１年次は５クラス募集の定員 198 名で入学し、６クラスの展開できめ細かく指導している。今年度からの専門学科では１年次は３学科３クラス募集の定員 117 名で入学し、ミックスホームルームの４クラス展開で指導している。生徒数は現在 504 名（男子 224 名、女子 280 名）在籍している。総合学科生徒は１年次には系列に関係なく全員が「農業と環境」を学ぶ特徴がある。２年次よりそれぞれの系列に分かれ、系列内の科目を選択、学びを深めていく。専門学科の生徒は 2 年次から学科毎のクラスとして専門を深めていく。

（２）教育目標

教育目標は、「生徒の人格形成を目指し、平和で民主的な国家の一員となり、進んでその形成者として個人の価値を高め、真理と正義を愛し、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身共に健康なる社会人になるよう教育する」、校訓として「至誠勤労」を掲げている。

２．教育課程について

本校の教育課程は今年度から総合学科と専門学科が混在しているため総合学科での取組み例を示す。

必修科目、系列選択科目、自由選択科目がある。１年次は全科目必修科目で、２年次から必修科目と系列科目および自由選択科目となる。

(1)地域環境系列について　本校における農業土木教育は、専門高校時の農林土木科、環境土木科からの流れをくみ、現在は地域環境系列の中で行われている。１年次で「農業と環境」において農業の多面的機能、物質循環の重要性を学習し、環境保全に配慮する態度を育て、２年次からの専門教育に関連付けていく。

(2)履修する専門科目（　）は単位数

１年次：農業と環境（３）

２年次：測量（２）、農業土木設計（２）、農業土木施工（２）、水循環（２）、
土木実習（２）、土質（２）、森林科学（２）、森林経営（２）

３年次：測量（２）、農業土木設計（２）、農業土木施工（２）、水循環（２）、
土木実習（２）、社会基盤工学（２）、森林科学（２）、森林経営（２）、
林産物利用（２）

３．専門学科から総合学科、再び専門学科へ

農林土木科は社会基盤の整備、農地の整備と土地改良を行う土木技術者の養成のために、昭和 32 年 4 月に設置された。以後、農林土木科として 33 回、環境土木科として 20 回の卒

業生を送り出し、農業土木・土木の技術者として地元地域を中心に農村基盤、社会基盤の整備に携わってきた。中でも技術系公務員として、農林水産省、国土交通省、県庁、市役所、町村役場などに多くの卒業生が活躍している。

平成 22 年 4 月に専門学科から総合学科に改編され、地域環境系列として農林土木科・環境土木科の伝統を引き継ぎながら、農業土木教育の取組みを充実させることとした。総合学科での取組みでも数の波はあるものの土木技術者の担い手として多くの卒業生が育っている。平成 29 年 4 月に専門学科に改編され、環境緑地科として農業土木教育を引き継いでいく。

４．伝統的な農業教育

本校では農業教育の要として明治 43 年に箱根の外輪にあたる場所に矢倉沢演習林が設置された。現在では、演習林の面積は約 30 ヘクタールあり、植栽面積の約８割はヒノキである。また演習林には「黒ヶ畑寮」という宿泊施設があり、演習林での管理作業や宿泊学習に利用している。かまどで自炊しながらの実習に伝統をみることができる。

1 年次生には夏休みを利用し、全クラスが１クラスごとに１泊２日で生活訓練と環境教育学習を実施している。演習林内を見学しながら、森林の果たしている様々な機能や森林の管理と環境保全について学習する。地域環境系列の生徒は３年次に実習としてコンパス測量・路線測量・砂防ダムの設計などを実施し、現場教育に力を入れて取り組んでいる。また、秋には演習林管理作業として全校生徒が交代で１日ずつ間伐・枝打ちなどの森林の管理作業を行っている。この作業を通して健全な森林の育成のためには計画的な保育・管理が必要であることを生徒一人ひとりが学ぶ場となっている。

したがってこの演習林は、生徒が体験的に森林の果たす役割や森林の大切さを学ぶ「学びの森」として重要な役割を果たしている。

本校が所有する矢倉沢演習林においての創立以来百余年に渡る組織的・計画的な林業教育や環境教育が全国的に高く評価され、昨年度全日本学校関係緑化コンクール学校林活動の部で「特選」農林水産大臣賞を受賞した。

また、総合学科に改編されて以降実施していないが、委託実習として官公庁や民間企業での現場実習を行ってきた。内容は時代に合わせて変化させてきたものの、２週間以上の企業体験を通して、土木技術者に対する意識づけと社会人としての心構えについて学習を深めてきた伝統があった。これらの実習は土木技術者の担い手の入り口としてとても重要な位置づけになっていたものであり、今後、専門学科としてリスタートしていく中で、デュアルシステムやインターンシップにも繋がる内容として復活していきたい教育活動である。

５．まとめ

総合学科に改編後、入学当初より卒業後の進路をイメージできていない生徒が多くなっている。また、今年度から専門学科としてリスタートしたが、土木技術者の担い手として入学してきた生徒は数少ない状況である。中学生への働きかけを含め進路をイメージできる入学生確保も課題のひとつではないか。

学科改編を繰り返しているが、伝統ある高等学校として卒業生も多く、比較的土木関係からの求人が多くあり、公務員、鉄道関連、地元建設業への就職者が多い。反面、大学・専門学校への進学を希望する生徒が極端に減少している。

６．おわりに

地域環境系列を選択している生徒や環境緑地科に入学してきた生徒それぞれの目的意識を高める工夫を凝らしながら土木関連の資格取得に力を入れ、これまで築いてきた伝統を活かした教育を実践し、今後も地域の社会基盤づくりに貢献できる生徒の育成に努めたい。